

作者・筆者からのメッセージ

さまざまな情報や価値観にあふれた現代。人間関係の悩みや未来への不安を抱えている生徒もいることでしょう。新版では、彼らが自らの力で未来を切りひらいていくきっかけを与えてくれるような作品を数多く掲載しました。そのうちの三人の方に、作品に込めた思いを寄せていただきました。

「花曇りの向こう」

瀬尾まいこ
(1年・物語) → P25

中学生になって、なかなか新しいクラスになじめない「僕」。でも、ちょっとした買い物がきっかけで、曇り空の向こうに少し光が見えてきた予感が……。新入生が感じる不安と期待を、関西弁の祖母との軽妙なやり取りを織り交ぜながら描く。



みあげればがれきの上にこいのぼり
未来への川登り続ける
いつだって道のタンポポ負けてない
こんなところでくじけるものか
なくなったまた一からのスタートだ
ともに描こう「希望」のスケッチ

「空を見上げて」

山中 勉
(1年・随筆) → P26

東日本大震災で被災した中学生たちが、自分の思いを五・七・五の言葉に乗せることで心を開き、そこに日本や世界の人々から下の句が寄せられ、連句となって心と心がつながっていく。実際の出来事をもとに、言葉のもつ力について考えさせる作品。

「誰かの代わりに」

鷲田清一
(3年・論説) → P27

現代に生きる人々を苦しめている命題「自分にしかないものは何だろう」。人はそこから「こんな自分が、ここにいていいのだろうか」という切ない問いを感じてしまう。そこに示されるのは、筆者からの「誰かの代わりに」という言葉。卒業を迎える3年生へ、生き方を考えさせるメッセージ。

中学校という場所

「花曇りの向こう」(1年)

瀬尾まいこ
小説家

以前私は中学校で働いていた。そのとき、いつも感心させられていたのは、生徒たちが自分のいる場所でいろんな思いを抱えながらも前に進んでいたところだ。中学校には楽しいこともある、強制的なこともいくつかある。苦手な相手と協力しなくてはいけないことも、不得意なことに打ち込まないといけないこともある。それなのに、中学生は大人より逃げ出す手段が少ない。悪ぶってみたり、投げやりになってみたり、自分を抑えて相手に合わせてみたり。厄介な感情に振り回されてうまく行動できないことも多い年頃なのに、今いる場所で何とかしようとしている姿は、いじらしくも眩しくもあり、尊敬せずにはいられなかった。

ある学級を担任していた時、O君という生徒がやんちゃをしすぎた結果クラスから浮いてしまったことがあった。学級にも流れがあって、O君の豪快さがもてはやされていた時もあったのに、空気が変わりぽつんと浮いてしまったのだ。それなのに、運動神経がよかった彼は、その年の駅伝メンバーに選ばれてしまった。そのうえ、その年は陸上部員が少なく、駅伝選手六人のうち五人が私のクラスの生徒で構成されることとなった。大きなわだかまりができた仲間との駅伝練習は、傍目に見てもつらいものがあつた。でも、O君はばつの悪さを押し殺しながら、練習に参加し黙々と走った。他のメンバーもぎくしゃくした空気を何とかしようと苦心していた。彼らだけではな。同じクラスの生徒たちもみんなでこっそり練習して歌を贈り、メッセージを書いた色紙を渡しメンバーを盛り立てた。それぞれいろんな思いがあるはずなのに、仲間のために動いてしまうのが中学生だ。もちろん、すべてが解決したわけではない。しかし、無事にO君を含めたメンバーで駅伝大会に出場し、さらには府大会まで勝ち進むこともできた。



1974年大阪府生まれ。小説家。2005年「幸福な食卓」で吉川英治文学新人賞、08年「戸村飯店 青春100連発」で坪田譲治文学賞を受賞。主な著書に「卵の結」(新潮社)、「図書館の神様」(筑摩書房)など。

少し前に、その時のことを題材に本を書き、O君に送った。もう二十歳を越えたO君は早速読んでくれ、すぐに返事をくれた。あの時は本当につらかったけど、みんながあきらめずに引っ張ってくれてよかった。そのおかげで今があると思う。みんなに感謝してる。と。(中略)

中学生は同じ場にいる自分と同じ中学生を放っておけない。そして、今の状況をよくよくしたいという思いを誰もがどこかに持っている。中学校は、そんな生徒たちが集まった場なのだ。うまくいくことばかりではない。だけど、失敗しても大丈夫なのは事実だ。いつだって、中学校には次につながるきっかけが転がっている。何度見過ごしても、かすかな希望がまたやって来る。中学生に、今いるのがそういう場所だということを通してでも気づいてもらえたら。そんな思いをこめて、今回の話を書きました。

※ P25~27の文章は、学習指導書の「作者・筆者の言葉」に掲載予定の内容を抜粋したものです。

宇宙と国語が出会うとき

「空を見上げて」（二年）

山中 勉

宇宙航空システムエンジニア

私は、二〇〇一年から地球人の言葉や作品を宇宙に輝く星に打ち上げる計画を立て、世界中の人々と俳句や詩や宇宙図（宇宙のイメージをみんなで描いた図）を協創する活動を進めています。ところが、震災前に応募のあったいくつかの地域の学校は被災して連絡が途絶えてしまいました。何とか力になれないか考えていたとき、支援を求める新聞記事を見つけ、それをきっかけに女川での活動が始まりました。

教材ではたまたま震災のことに触れていますが、どんな状況にあっても一人の人間であること、地球人であることに変わりはなく、世界中の人と絆やつながりを確かめたい、という思いは誰もが変わずに持っているはず。女川の中学生が作ってくれた「被災者と 呼ばれ続けて もう三年」という句があります。被災地だからという理由で、その地域の生徒とつながろうと考えるのは少し違うんじゃないか。同じ人間として、地球人として、対等の立場で付き合ってほしいと言われている気がします。

生徒の俳句を国内外の人々に届け、連句の形にして星に打ち上げるのは世界初の試みですが、その中でも教材中の「みあげれば がれきの上に こいのぼり」の句に、こいのぼりになじみが薄い世界中の人々からも返歌がよせられました。かわいそうだからではなく、空を悠々と泳ぐ鯉に希望をみいだそうとするこの素晴らしさを、同じ人間として瞬間的に共有できたからではないでしょうか。言葉がもつ人間と人間をつなげる力の大きいなる可能性を感じます。

子どもの作品を見ると、学年とともに世界観が変わるのですが、中学生だと「自分が確かに存在している証」を、宇宙的なスケールで他者とつながる中で確かめようとする子が多いように感じます。宇宙に打ち上げる俳句や詩などを作ることは、教室という小宇宙を飛び超え、全宇宙とつながり、そのつながりの中で「私は何者か？」を考えるきっかけになります。だから、生徒一人ひとりが哲学者であり、詩人であり、研究者でもあるのです。

この教材を読み、星に届ける俳句や連句を作ろうと考える先生もいらつしやるかと思えます。その際、先生方には、生徒がもつ豊かな可能性を信じてほしい。生徒は「生徒」である以前に、この宇宙に生を受けた知的生命体であり、人類の一員であり、地球人です。生徒としてではなく、一人の人間として全作品をそのまま受け止めてほしいのです。

私は、宇宙に関わる仕事をしており、一見国語とは無関係です。しかし、この活動を通して子どもたちから教えてもらったことは、宇宙と国語が出会うとき、私たちは一人の人間に還ることができるということだったのです。



1958年東京都生まれ。宇宙航空システムエンジニア。JAXAの主幹研究員を経て、現在は（株）IHIに勤務。星に届ける作品創りを実践中。主な著書に「みあげれば がれきの上に こいのぼり…」(編著 遊行社)など。

〈代理〉と〈代替〉

「誰かの代わりに」（三年）

鷲田清一

哲学者

最近の生徒たちには、みずからをますます追いつめるような強迫が、じわりじわりつのってきているような気がしてなりません。（中略）

おそらく、自分がこのままで大丈夫なのか、不安なのだろうと思います。社会の先行きが見えない、これからもっとよくなりそうだととても思えないということもあって、このままでは身を支えきれない、棄てられるかもしれないという、根拠もはっきりしない怯えを突き離せないからでしょう。つまり、「できなくなったら終わり」という感覚です。「できなくても大丈夫」という感覚が持てないのです。

それは（教科書中の文章でも少しふれましたが）、「これをするのは別におまえでなくともいい」「おまえの代わりなんかいくらでもある」という「代わり」（これをわたしは《代替・可能性》と呼んでいます）ではなくて、それとはちょうど逆の「代わり」、つまり「あなたができないんだったら、きつと誰かが代わりにやってくれるよ」という

「代わり」（これは《代理・可能性》です）。国家や社会システムに委せ、また依存するのではなく、自分たちで支え合う、いつてみれば自前のセイフティ・ネットをきちんと用意しておくこと、これが本文中で「インターディペンデンス（支え合い）のネットワーク」と呼んだものです。

じつさい、一九九〇年代の前半、バブルの崩壊時以降に思春期を送ることになった世代には、こういう感覚がじわじわ浸透していて、UターンやIターンというかたちで地方を仕事と生活の地盤とする若者たちのグループがこれまたじわりじわり増えてきています。

わたしはこうした静かな動きになにか新しいまっとうな生き方の兆しを見えています。現代という時代、とくに3・11以後、わたしたちの日常生活の基盤がいかにわたしたち自身によって制御不可能なものであるかが露見してきました。電気というわたしたちに不可欠のエネルギーを供給する原発という装置がいったん事故を起こせば

まったくコントロール不能になること。わたしたちの労働環境から物価の変動、（食

の）安全性までを規定しているのが、グローバル経済という、だれも（経営者自身ですらも）コントロールできない投機的なゲーム（金融カジノ）に支配されているということ。このことの危うさを、敏感な二、三十代の人たちはすでに視野に入れて活動しはじめています。物流から経済、食材調達から仕事の連携まで、自分たちである程度コントロール可能な規模の仕組みに、暮らしの基盤を組み立てなおしていこうというわけですね。

このことの意味するところを生徒たちに伝えようと、この本文を草しました。



1949年京都府生まれ。哲学者。京都市立芸術大学学長。専攻は臨床哲学・倫理学。主な著書に『語りきれないこと 危機と傷みの哲学』（角川学芸出版）、「じぶん・この不思議な存在」（講談社）など。